

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	情 : 雑録
Author(s)	柴山, 岡城
Citation	龍南會雜誌, 79 : 21 - 28
Issue date	1900-06-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5561
Right	

にあり。成敗と權威と生死と遂に何者ぞ、夕をも俟たぬ蜉蝣の身にもましてはかなき煩悶の境を脱
ぎ、願くはかの安慰の裡にひるざる闇に獨りきらめく星のこゝろを讀め。

情

柴山岡城

小犬隔花空吠影、夜深宮禁有誰來、春月朦朧として眠るが如く、夜風徐るに吹いて花影を揺かすの
時、一犬遠く吠えて落花數點、佳人と才子とは巧みに自然の情景を弄ぎ、高青邱の詩情は巧みに這
般の情景を寫ま出きて餘蘊なき。天に情なきか、人に涙なきか。請ふ見よ、月は朧ろに情の雲に隠
れ、花は靜かに情の風に笑ふ。此間熱血熱涙何か爲めに迷り何が爲めに賤く。げにや情海の浩波は
貴賤と上下の柵欄を許さず、王公貴族の樓台より三家村裏の小天地まで、あらゆる人心に往來さつ。
皎月一輪天に懸る處には契を横へて雁を唳せし古英雄か、戈とりて月見る度に思ふ哉と嘆せむ武士
の情か、花ならば探りても見む今日の月と泣きし盲者の涙か、而えて又かの白醜々たる庭前の雪に
は、四十七士の忠情か、櫻田の熱血か、否又吾人はかの浦里と袖袂とをも思はざる可からず。
頭を回せば天遠くきて地は廣く、既往茫として夢の如ければ、未來も亦茫ときて夢の如し。此間英
雄豪傑幾人が立ちて幾人が斃れ、夜半夢未だ暖かならざるに、天旋地轉、轉た多情の詩人をして、
可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裡人と嘆せむ。嗚呼果敢なき生命を哀れの天地に享け、煙の如く消
え煙の如く去る、其間何物か残り何物か存する、松柏千年終是朽、况んや塚中の枯骨、風雨空しく
曝して幾百年、終に土となり塵と散すれば、哀れ震天動地の大英雄、渾圓球上又一物の遺跡たも殘

す處なきに非ずや。此間千年の下滅せず萬古の下亡びざるもの、唯夫れ情の一元素なるか。天長地久有時盡、此恨綿々無絶期、嗚呼此の恨、千秋萬古不滅不朽の情にあらすや。且つや人生の歴史は只此の情の一片のみ。請ふ見よ、金甲を戴き赤鬼に跨り、龍驤驕歩天下の間を縦横せよ戰國の一匹夫、何ぞ末路の一美姬の影人形に似たるあるや。項羽の虞姬に於ける、義經の靜に於けるコンナンクスビーがシエスに於ける、ランテナツク侯が三人の孤兒に於ける、若しくは始皇の阿房宮も、權兵衛八兵衛が九尺二間も、觀じ來れば人生の歴史は唯夫れ情の波瀾なるか。一波高くまて一波低く、兩波合して雪山崩るゝ處、佳人と才子と英雄と豪傑とを問はず、浮世の人類が榮譽と汚辱と利慾と失敗との間に流離轉變生死の境に徘徊するに似ざらんや。

一昂一落、搖々とまて定りなきは波の常なり。然れ共水面は嘗て變ずる所なま。八道を席捲せし大英雄も朝の露と消えては偉業の夢跡もなく、三千の寵を一身に放りせよ楊家の傾國も、馬崔の泥土に委しては長生殿の私語頼むに由なし。英雄斃れて豪傑起り、才子泣いて佳人哭す。人事の紛々萬波の錯雜に似たるあるも、情海の水面は萬古一貫して、毫も變ずる處なま。吾人は心理的に情を説明するものに非ざるも請ふ歴史と事實とによりて聊か之を説かしめよ。

二

至高の琴線に撃たれては。天使の來迎に接すべく。惡魔の教唆に感しては那落の底まで墮落し得べきは夫れ情なる哉。只一感、彼は天使となるの資格を備へながら禽獸とまで墮落するなり。彼は天堂無限の靈光に接し得るも、地獄の饑鬼と迄墮落して其惡鬼たるを知らざる也。彼は飄々として浮雲の如く些少の刺激にも左右せらるれば、終生を通じて其高潮を維持するは頗る難ま。其昇るや難

けれども、其墮落するや、一瞬千里無限に墮落して其底止する所を知らず。彼が自己の墮落を自覺
きたるの一瞬は再び昇天の使命に接する一機なり。

四面頭を回らせば、危々たるカトセーラの斷礎石欲げ響き、百年榮華の夢漢々ぞきて尋ね可からざ
るの處、瞑目默思せる羅馬のマリウス、彼は生れ乍らの惡魔にも非ず、然れども當時彼が心中に蟠
りしもの抑も何ぞ。回天の偉圖空く破れ、身は之れ流浪不羈の客、冷かなる圓柱も圓天井も、此時
に當りては彼の熱情を冷すに足らず、躊躇停留遙かに羅馬の天を仰ぎ、俯て汚面弊衣のマリウス
を自覺したるの一瞬時、彼は惡魔か、惡魔か、「忠義のマリウスを放逐したる羅馬よ、今惡魔のマリ
ウスを受取れよ」と血眼天を睨みて憤起せるの一刹那、彼は確かに惡魔たりと相違なかり。彼
は彼の故國を血にせんとせり。羅馬府民を屠らんとせり。然れども記憶せよ、此の殘忍暴戾のマリ
ウスは羅馬府外に老母の泣啼に遇ひ、空しく脊を撫えて其素志を翻せしことを。鬼あさみ絞れば玉
の露どかや、吾人は史を讀みて茲に到る毎に、未だ彼が爲めに一掬の涙なき能はず。何となれば、
彼は故國の大罪人たりしと共に、此の一瞬、彼は情の爲めには愛すべき嘉みす可き可憐漢なればな
り。

吾人をして尙一例を取らまめよ。強盜殺人彼の如く惡む可き罵る可き石川五右衛門、彼は人間以外
の惡魔なり、慈悲も情もなき彼が爲めには一葉の風にそよぐ程たもなし、然れども彼が最後の斷末魔、
釜中に其子五郎市を抱いて男泣きに涙に咽ぶの際、彼は實に大慈大悲の高僧なり。吾人は此時に當
りては彼か生前犯せざるゆる不徳と罪惡とを忘却して、只愛すべき吊ふ可き可憐漢と外思ふ能は
ざる也。只夫れ五右衛門のみならず、淫奔彼女の如きマクグデーレンもキリストが與へ去一大感激は、

再び汚泥の底中より清淨無垢の天使とて蘇生せしにあらすや。
 情の墮落は人の墮落を意味す。吾人は勿肺らしき教壇に立つもの悉く慈悲忍辱の高僧なるやを知らず。朝に笑いて吳客を迎へ、夕に泣いて越人を送るもの、吾人は悉く非情の妖魔たるやを知らず。何となれば、只一轉彼等は天堂無限の榮光より地獄の惡魔と迄、自由自在に昇降を得べければなり。

三

花に寐ねては。夢は胡蝶のあとを追ひ、月に照らされては思是れ雲井の雁をめぐる。一葉動いて天
 下秋を知れば、山寺も砧の音を聞き、亂山幽谷に浮世の塵を離斷するも鹿の鳴く音を如何せん。人
 は畢竟情と離縁する能はざるか、彼は一躍えて富豪とならんと欲す、情は彼の算盤を壓し一珠も動
 く能はざらざる、彼は大勇者たらんと欲す、情は彼の袖にすがりて離別の涙に堪へざらしむ、彼は
 大學者とならんと欲す、情は彼のノートを塗抹して十年の苦學も佳人の一顧に如かざらしむ、彼は
 情てふ愛人だに離縁すれば天外自由の身となるなり、然れども情は飽まで執着して彼も亦強て此愛
 人を伴はんとす。然れども期せよ、野中の畦道は道狹うまて相合傘の通るを許さず。彼は行かれざ
 るを強て行き、伴はれざるを強て伴ひ、遂に自ら荊障を作りて捕虜となり、囚徒となり、馬の如く
 働き牛の如く逐はれ、甘んじて其桔槔を受く、吾人は茲に梅川と忠兵衛とを云はざるなり、阿古屋
 と景清とを云はざるなり、然れども觀て來れば浮世は情か、情は浮世か。今夫れ人間界よりわらゆ
 る情を取り去れよ、餘す處は稍複雑なる有機細胞の集塊に過ぎず。人がパン以外に猶欲えて止まら
 るもの、是れ豈に人がアミ井以上を超然たる所以ならずや。

情は實に人心を支配す。吾人はトイラア、オプ、セ、シを讀みてカリナットが教へられざるに自ら

宇宙は情の大塊なり。人は情塊中の一片なり。情によりて景起り、景に従ひて情動く、鴨立澤の秋の夕には圓頂黒衣の行脚僧も何となく悲哀の念に動かされ、烟霞一抹桃李の梢をこむる際には、村裏の茅屋も春めくにわらずや。且つや景清も花見の座には一個の七兵衛なり、吾人は小敷の異例を除くの外石川五衛門が貴族の門に出でたるを聞かず、艱難汝を王にすといふも深山大澤偉人を生ずといふも豈に這般の意味なからんや。宜なり孟母は三遷の教を以て其子を導き、面壁九年は達磨の達磨たる所以なり。吾人は四面の情景が吾人に興ふる刺激の大なるを知ると共に、吾人の情が景を起すの更に大なるを知る。春風桃李花下の飲、秋夜高樓明月の宴、興に乗せて仰いで歌ひ立ちて舞ふもの吾に一片の情なくんば、何ぞ其樂を分たんや。且つや八百余言の長恨歌も伏見の里の雪の常盤も吾に一片の情なくんば、何ぞ其愁を共にせん。今夫れ明け行く夜の幕に通神樂の音を聞けば新春下町の軒端を聯想し、新内の流を聞きては春霄月細く柳堤烟をこめて人稀なる處、墨繪にまがふ橋の袂を思ふものは、吾人の美的情操が書き出す景にわらずや。我に一片の情あり、是に於てか書を読みて楽しく、詩を吟きて興あり、西施の爲めに其美を掩ふ事能はず、無鹽も爲めに其醜を藏すこと能はず。我に一片の情なけんか、金殿玉樓も月もる賤か屋に劣り、美酒嘉穀も濁膠大根の粗餐に如かず。觀之來れば幽靈の濱風も我が情によりて起り、巫山の神女も我が情によりて表はれ、天地萬物も我に情なくんばまた無さに異らざらん。吾人は情が心理上智慧外方面に最大なる勢力を有するを知ると共に、ドラゴンの血律は端なく胸中に想起せられずんばわらず。當時希臘列國の牛耳をとりしもの夫れスバルタか。而して其茲に至らめず所以のもの夫れドラゴナか。彼は腦中に機關的國家を築造ま是に従つて彼の計企を試みむとせり、而して彼の計企は其効を奏ま、強固勇敢

なるスバルタ國とスバルタ人は百年の間赫々として旭日の榮光を有し、希臘列國は勿論遠く小亞細亞羅馬までも凜たる其威風を輝せり。彼は經世治國の大偉人に相違なま、國家富疆の大策士に相違なし、又熱誠國を思ふの大忠臣たりしに相違なま、然れども可惜彼の腦中には「情」の元素の欠乏にて従つて、彼の眼中には人倫なく道徳なく只國家なる一念に左右せられて、親子の情を没却し、夫婦の愛を絶滅し、あらゆる總ての物を國家隆盛の方便として之が犠牲に供したり。彼を以て等々く經世治國の大偉人たるソロンに比せよ。何と其雲泥の差あるや。可憐彼は自國の大忠臣たりしと共に情の天地には惡む可き罵る可き千載一遇の大逆賊なり。吾人は昔時の教育家若しくは經世家が往及ドラゴ一の轍をふみて徒らにシルレルの罵倒を地下に聞かんと悲む者なり。

五

人は常に胸中の情趣を洩さんと欲す。花に對して歌ひ月を仰いで泣く。風聲露光或は詞に或は筆に、或は顔色に或は動作に常に其胸中の情を表出せんとするは又人の情なり。吾人は其肉慾なると情操なるとを問はず、等しく共に本能的なるを知る。嬰兒の生れながらに去て乳を求め無心に笑ひ無心に泣く、吾人は別に不自然と稱せざる也。渴きて飲み飢えて食ひ飽いて眠る、吾人は別に不道徳と稱せざる也。然らば則ち松の風に吹き合する笛の音も、蹴られて滾す露の露も亦人情自然のものにあらすや。吾人はかの狹義に於ける情なるものが往々人心を誤まればとてキリストが人の子に對する愛情を以て有害なりとなす能はざるが如く、情の發動は智意的發動の有害物なりとて孟子の所謂惻隱の心を以て等々く有害なりとなす能はず。吾人は支那流の所謂天子の資格が此の情の開展物なるを知ると共に情其物を以て不必要有害物なりとは如何なる方面よりするも首肯し能はざる也。

吾人は既にシロンとドラヨールを云へり。香粉の如き月の如き亞典人は情によりて起る情によつて亡びたり。石の如き鐵の如きスバル人は血によりて起る血によつて倒れたり。一利一害は元より數に於て免れざる處なるも、世界の文明史上に遺したる儼業何ぞ雲泥の差違あるや。

かく云へばとて吾人は伊勢、源語を以て世界の交明史となすものに非ず、又道德經となすものに非ず。而して又光源氏在原業平を以て眞平人間の好模範となすものに非ず。吾人は素より姑息の情は身を誤るを知る。

聖賢の女房小供を可愛がるも凡人の女房小供を可愛がるも愚愛に二つはなけれど凡人は愛に溺るるが故に愛に迷ひて愛を害ひ色に溺るるが故に色を以て身を喪ふ然れば智仁も甚だしく行はんとせしめて智仁に溺る、時は害あり宋の襄公が敵の不意を打たずして夥多の兵士を失ひたる類はより義信も甚だしく義信を行はんとせしめて義信に溺る、時は害あり尾生が女子と約束して橋に抱き着きて死したる類是なり。

吾人豈に多く云ふを要せんや。情によりて情に溺るゝもの、豈に光源氏と業平とのみに限らん。吾人今此篇を終るに臨み只一言以て此章を結はしめよ。石婦は石を抱いても尙慈母たるの情を洩らし、三年師の場に結びても尙至情の禁する能はざるは人が萬物の靈たる故ならずや。醜美目に依り清濁耳に從へばとて、深山巖窟に汝の耳目を毀損して遠く好惡の境を離斷せよとは吾人はその不自然不道德の極なるを知る。情は神聖なり。至高の情の動く處は即ち不言の眞理なり。舜の無爲にして化すと云ひ、刑措いて用ゐざる四十年といふ、其の能く茲に至らば又道德と法律とを要せざる也。男子世に處す須らく思を皎月の清きに比え肉慾以上に汝の情を發揮する目的と方法とを誤る勿れ。

花明柳暗

白 坊